

## 19世紀インドのローマ字論争

蒲 豊 彦

## は じ め に

よく知られているように、日本と中国のいずれにおいても、それぞれの言語を表記する文字をローマ字（ラテン文字）に置き換えようという議論が、一時期、非常にさかんに行われ、それにたいする研究も蓄積されてきている。一方、イギリス植民地下のインドでも、すでに1830年代に同様のローマ字論争が発生していた。インドのローマ字論は、大きく見れば、近代ヨーロッパの植民地主義が振りかざした「文明化の使命」論、もうすこし限定すれば、1830年代のころにピークを迎える英語教育論争に直結しており、イギリスによるインド統治史を考えるうえで重要な内容を含んでいると思われる。

しかし、これについては、いまだに専門的な研究が存在せず、放置されている状態である。また、その位置づけも十分ではない。1834年に発生したローマ字論争は、英語教育論争の突破口だった。この点については、ローマ字論を主導したトレヴェリアン（Charles Edward Trevelyan）について伝記的研究を行った Hilliker、英語教育論争にひとつの結論を出したマコーリ（Thomas Babington Macaulay）についての代表的研究者である Clive、英語教育論争の資料集を編纂した Lynn Zastoupil と Martin Moir などの研究者の間で、意見が一致している。ところが、Lynn Zastoupil と Martin Moir の資料集は、ローマ字論争関係の文献を一切収録せず、1834年は空白となっている。一方、ローマ字論争の最中に編纂された論争資料集を、Monier Williamsが1859年に再編集しているのだが、その編集方法および解説も、ローマ字論争を英語教育論争のなかに位置づけるものではない。両論争の内的関連にたいする認識が不十分なために、このよ

うなことが起っているのだろう。

本稿は、言語のローマ字化という問題を通して、ヨーロッパ人のアジア認識、当時のアジアの言語状況等を解明することを目的としつつ、その基礎作業のひとつとして、インドのローマ字論の実態をさぐるものである。以下、第Ⅰ章では、英語教育論争からローマ字論争に至る経緯、第Ⅱ章では、論争は大衆教育から国民文学、国民統合の問題にまで及ぶものだったこと、第Ⅲ章では、新たに推奨されたローマ字表記法には、合理性、普遍性、大衆教育への志向があったこと、そして第Ⅳ章で、ローマ字論がどのように終焉に向かったのかを、論ずる。

## I ローマ字論の発生

### 1 インドの近代化と教育論争

ローマ字論争の検討に入るまえに、英語教育をめぐる論争が1830年代に激化するまでの経緯をまとめておこう。

イギリス東インド会社は従来、インドの諸言語や在来の司法を重視する政策をとってきた。そのようななかから、インドの文学や哲学、言語に一定の敬意を払いつつ、その研究をめざす、インドを対象とした狭義のオリエンタリズムも現れる。その二大牙城ともいうべきものが、1784年に設置されたアジア協会と、1800年に開校したフォート=ウィリアム=カレッジであった。

ところが一方、そのころイギリス本国では、あらたな思潮がインドの統治政策に影響をおよぼしつつあった。福音主義運動と、功利主義的思想である。そして紆余曲折を経たのち、イギリス東インド会社にたいする1813年の特許状で、ついに宣教師の活動が許可されることになった。そして同時に、「毎年少なくとも10万ルピー以上を取り分け、学問の復興と改善、インド人知識人への奨励、インドのイギリス領内の住民への科学知識の導入と普及促進にあてねばならない」とする教育条項が付加された。この条項が、伝統的な学問の復興と西洋の科学の導入という異なる目標を同時に含むのは、オリエンタリズム的ビジョンと福音主義的ビジョンとの妥協の産物で

あるという (Zastoupil and Moir: 7)。

ただしこの直後、1814年から16年まではネパールとのゲルカ戦争、つづく17年、18年の第三次マラーター戦争および同地域の戦後統治などに手をとられて、イギリス当局は1813年の教育条項をながく放置することになった。1823年にいたって、この状態により変化が訪れ、教育条項を実施するためにベンガルに General Committee of Public Instruction (以下、GCPI と略す) が設置された。しかし、オリエンタリストのウィルソン (Horace Hayman Wilson) が、委員会設置当初から1832年まで一貫して書記を勤めていたことから分るように、この委員会はオリエンタリストにおさえられていた。ウィルソンはアジア協会の書記もながく勤めたのち、32年に帰国し、33年にオックスフォード大学のサンスクリット学の教授となる人物である。イギリス本国で福音主義的、功利主義的なインド統治観が出はじめていたとはいえ、やはりオリエンタリズムの力の強かったことが窺え、実際、GCPI の政策にも新味はなかった。

この状況を逆転させたのが、1828年にベンガル総督となり、ひきつづき34年から初代のインド総督となったベンティンク (William Bentinck) である。かれは、オリエンタリストに反対した最初の総督だとされる (Kopf: 241)。ベンティンクは、財政改革をはじめとして、インドの西欧化にむけて、さまざまな改革をすすめた。寡婦の殉死、いわゆるサティーの禁止もそのひとつであり、かれはベンサムやジェームズ=ミルの功利主義をうけつぎ、またそれ以上に、福音主義がその改革の動機になっているとされる (Hilliker: 285)。

1832年、GCPI の書記として同委員会を動かしてきたオリエンタリストのウィルソンが、イギリスに戻った。このときベンティンクが補充任命した委員はすべて改革派で、その中心人物がトレヴェリアンであった。トレヴェリアンは当時カルカッタでインド人の教育改善に携っていた植民地行政官である。委員会の内部には、しかしプリンセップ (James Prinsep) をはじめとするオリエンタリストがまだ残っていた。委員会でのトレヴェリアンの攻撃対象のひとつは、Native Medical Institution の管理者だったタイトラー (John Tytler) が

すすめていた、ヨーロッパの医学をアラビア語に翻訳しようとする計画だった。トレヴェリアンは、適切な翻訳は不可能であり、医学教育は英語で行うほうがよい、とした (Hilliker: 283)。

だが委員会内での議論は膠着状態に入りつつあり、そこでトレヴェリアンが、委員会への外部からの圧力を期待してはじめて公開の場に持出した論点が、すでに述べたように、1834年1月のローマ字化論であった。

## 2 『英語・ウルドゥー語辞書』

論争は、ローマ字のみで表記された『英語・ウルドゥー語辞書』の出版を、The Calcutta School-book Society が財政的に援助すべきかどうか、という問題からはじまった。この協会は教科書を作成することを目的として1817年に設置されたもので、政府の援助を受けていた。宣教師のトムソン (Joseph T. Thompson) が編集したこの辞書は、「上部地区のインド人が英語を、ヨーロッパ人がウルドゥー語を学ぶ助けになるように」と企画されたものだった (Williams: 1)。この案件が、1833年11月20日に同協会に提起されると、プリンセップとタイトラーが反対した。プリンセップは当時カルカッタの造幣局に勤めていたが、アショーク王の勅令 (碑文) をはじめて解読したことで知られる考古学者でもある。かれは、「トムソン氏の著作はヨーロッパ人のあいだではきっとすぐに売れるだろうが、われわれの世界ではだれもアラビア語やペルシア語、ヒンディー語の単語をローマ字で教えようとは思わないだろうと確信する」と述べ、さらに、そうしたやり方を「超急進主義」と呼んだ。一方のタイトラーは、同様にローマ字の使用を認めないだけでなく、トムソンの辞書には言語学的な誤りがおおいとして、「そのような著作を奨励するのは、まったく財源の無駄使いである」とまで酷評した (Williams: 2-3)。

これらの反対論にたいして、翌1834年1月、トレヴェリアンが、トムソンの辞書とヒンドスタニー語 (ウルドゥー語) のローマ字化を擁護する長文の覚書を発表し、これがローマ字論争の発端となっ

た (Williams: 3-33)。じつは、トムソンはもともとこのトレヴェリアンに勧められて『英語・ウルドゥー語辞書』を編集したのだった。ヒンドスタニー語は、北部インドで使われていた日常会話用の言語である。ムガル帝国の公用語というべきペルシア語や、またアラビア語、サンスクリットなどではなく、大衆の言語のひとつであるヒンドスタニー語のローマ字化を、トレヴェリアンはまず主張した。その意味は覚書のなかで明らかにされる。

覚書はおもに、①ローマ字のもつ普遍性、②ローマ字に切りかえることの利点、③大衆教育の観点からのオリエンタリズム批判、の3点から構成されている。順にその論点を整理してみよう。トレヴェリアンはまず、ローマ字がインドにとって外来のものであるという問題について、ローマ字のもつ普遍性の観点から反駁を試みる。すなわちローマ字はもともとラティウム地方のラテン語のためだけに使われた文字にすぎなかったが、それがやがて、ヨーロッパのみならず、南北アメリカ、オーストラリア、そして南洋諸島でさえ使われるようになっており、「ついには、全世界の普遍文字になりそうな勢いである」。さらに、そもそもインドにおいては、すでに外部からペルシア文字とアラビア文字が入っており、外来の文字ははじめての経験ではないはずだと指摘する。

トレヴェリアンはつぎに、②ローマ字に切りかえることの利点として、つぎの5点をあげる。(a) 文字の読みやすさ、(b) 印刷の経済性と速さ、(c) ナーガリー文字、ペルシア文字、アラビア文字など複数の文字を学ぶ必要がなくなること、(d) 国民文学の形成に役立つこと、(e) イギリスとインド両民族の相互理解が促進されること。このうち (d) と (e) についてすこし説明を補っておこう。トレヴェリアンは、インドの言語が英語とおなじ文字を採用すれば、英語から語彙を受けいれやすくなり、「より科学的で洗練された言語」である「英語から汲み出された語彙や概念が豊富に供給されることによって、その国民文学が豊かになるだろう」として、そうした語彙、概念の例として、virtue、honour、gratitude、patriotism、public spiritなどをあげる。そして、「こうした同化 (assimilation) に

よって、両民族の相互理解もおおいに促進される」という。

③の論点に入る前に、以上の点にたいするオリエンタリストの反論を見ておこう。トレヴェリアンは1月の「覚書」につづいて、2月には、補遺というべき第二の「覚書」を発表した。それらにたいして最初に本格的に反論したのは、タイトラーであった（Williams: 40-64）。その日付は不明だが、2月から4月までの間に発表されたと思われる。まずローマ字自体にかんして、ヨーロッパで使われているその表記法はそもそも不完全なものであると指摘するが、この点は第三章であらためて取り上げる。

つぎにローマ字の利便性にかんして、まず、文字の読みやすさについては活字が改良されてきているとする。経済性については、「翻訳はつねに原文よりも多くの言葉を含む」という一般論を援用して、東洋の言語をローマ字に移せばむしろ容量が増えるという。複数の文字を学んでいる現状については、インドのさまざまなアルファベット間の差異は、ローマン体とイタリック体、筆記体とゴシック体、大文字と小文字程度だとする。また国民文学の形成は「われわれの仕事ではない」とし、言語の融合にともなう相互理解にたいしては、たとえ数千、数万の単語を移入しても、互いに理解可能な言語にはならないだろうとして、フランス語とイタリア語、英語とドイツ語の関係を事例としてあげる。ただしこの最後の点については、タイトラーはトレヴェリアンの主張をやや矮小化して理解しているようである。

## II インドの近代化へ向けて

### 1 オリエンタリズム批判

トレヴェリアンのローマ字論は、前節で紹介した（d）、（e）からも分るように、英語および英語文化をより優れたものとみなす考え方をともなっているが、この論点は、③「大衆教育の観点からのオリエンタリズム批判」でさらに明瞭になる。当時、植民地行政官としてのトレヴェリアンは、自分が果たすべき最重要課題を、インドの大衆教育に置いていた（Clive: 353）。かれは、ローマ字論のなか

でもこの課題を何度もくりかえしつつ、次のように主張する (Williams: 16-21, 24)。「オリエンタリズムへの熱狂は、ウェルズリ (Marquis Wellesley) の時代から始まる。この貴人がめざしていたのは東洋の諸言語でヨーロッパ人を教育することであった。われわれの目的は、西洋の諸科学でアジア人を教育することである」。サンスクリットやアラビア語の研究という、「そうした手段によって、ひとつの国の真の知識の普及と道徳の向上が促されると考えるのは、ばかげたことである」。

そして、その実例として、1823年の創設以来 GCPI がかわってきた出版物の統計を示す。それはサンスクリット、アラビア語、ペルシア語、ヒンディー語の書物のみで、ベンガル語やウルドゥー語のものはまったく見当たらない。ヒンディー語の書物が4冊出版されているとはいえ、これも含めてすべてが古典であり、大衆教育には不向きだとする。さらに、その内容といえば、娼婦を題材とした好色なものがあるという。すなわち、「もしわれわれが真のオリエンタリストならば、東洋の幸福をわれわれの取り組みの主目的とすべきだ。(中略) ところがわれわれがしていることは、ちょうどその正反対である。東洋の大衆教育のために、適切なことはなにもなされていない」のである。

さらに、イギリス本国で台頭していた福音主義運動と功利主義的思想に触れたが、この点においてインドとの関係で最初に注目すべき人物として、グラント (Charles Grant) を挙げることができる (小谷汪之: 48-54)。1793年にイギリス東インド会社の特許状が更新されるにあたって、その特許状法のなかにキリスト教の布教を認める条項を入れようとする運動が起こったが、その中心人物がこのグラントだった。かれは運動のために作成したパンフレットのなかで、ヒンドゥー教は墮落した宗教であること、インド人の幸福と道徳的向上が必要であり、社会の改良のためにはキリスト教と西洋の学術の導入が不可欠で、英語の普及をその最初のステップとする考えを提示した (Zastoupil and Moir: 5-6)。トレヴェリアンがグラント的なものを継承していることは明らかだろう。

つづいてトレヴェリアンは、話題をオリエンタリズム批判からトムソンの『英語・ウルドゥー語辞書』に戻し、その辞書にたいしては単純だという批判があるが、その点こそ重要なのであり、これは大衆の理解力と経済力に見合っており、大衆教育と英語への橋渡しの点で、推奨すべきものであるという。

オリエンタリズム批判にたいするタイトラーの反論には、トレヴェリアンほどの熱意は感じられない (Williams: 54-55)。タイトラーは、東洋の「科学」が劣っていることを認めつつも、東洋の学術を研究することには、思索的な面と実際の面との、ふたつの意義があるという。前者は、人間やその歴史についての知識を増やすことができる、ということ。後者は、東洋の言語を学ぶことによって、東洋の人々と交流し、かれらに教授することができる、ということである。そしてその際に重要なこととして、ヨーロッパの知識は翻訳なしでは東洋の人々のあいだに広めることはできず、また諸言語への翻訳には、学術言語の知識が必要だとする。タイトラーはこうして、サンスクリットやペルシア語、アラビア語の重要性を擲い上げようとする。

## 2 国民文学の形成

グラントが「英語の普及」に言及し、トレヴェリアンも、ローマ字で書かれたトムソンの辞書には「英語への橋渡し」の意義があるという。また前章第2節で触れたように、トレヴェリアンは、ローマ字化することによって英語から語彙が受容できるという考えを持っていた。ローマ字論と英語がどのように関係してくるのか、さらに詳しくみてみよう。

トレヴェリアンはかならずしもインドの大衆全体に英語を導入しようとしていたのではない。その点は、最初の「覚書」のなかでも次のように明瞭に述べられている。「この国の人々に知識を伝える最も簡便で最も効果的な方法は若者を英語の学問のなかで教育することであり、それが不可能なところでは、ヨーロッパの科学についての書物をかれら自身の諸言語に翻訳して提供することによって教



育することである」(Williams: 21)。

ここで「かれら自身の諸言語」というのは、ヒンドスタニー語、ベンガル語などの大衆語を指すが、当時、これらは言語としてまだ十分に成長しておらず、すくなくとも西洋の学術を伝えることのできるようなものではなかった。トレヴェリアンも、「ヒンドスタニー語はまだそれほど固定されてはいない」「大陸全体の大衆文学(popular literature)はまだまったく初期の段階にある。チョーサーの時代の英文学と同じ状態にあると言ってよいかも知れない」「その現地語文学(vernacular literature)はまだ幼年期にある」などと繰り返す(Williams: 28, 171-172, 191)。

このような状況は、インドの近代化にとって障害となると同時に、しかしローマ字導入論者にとってはひとつのチャンスでもあった。もしかりにヨーロッパで新しい表記法が導入されれば、それまで蓄積されてきた何百万冊もの本に影響をあたえる。しかし(古典は別として)インドではそのような問題は発生しないのである。そして同時に、「われわれは、いずれにしても、ほとんど最初から現地の文学を構築せねばならない」(Williams: 191)。トレヴェリアンはここで、論理をおおきく飛躍させてしまっている。国民文学の創出という重い課題を、なんのためらいもなく自分たちの責務だと考えるのである。かれは別の文章ではさらに限定して、その機会は宣教師にゆだねられているとして、「インドの大衆のためのキリスト教文学の形成」にも言及する(Williams: 172)。前章第2節で見たように、これにたいしてタイトラーは、国民文学の形成は「われわれの仕事ではない」と批判した。

では、トレヴェリアンたちは、どのような国民文学が望ましいと考えたのか。上記の文章に続けて、「その最初の目標は、西洋の(中略)すぐれた知識を東洋の諸語に移入することになるだろう」とする。これをさらに具体化すれば、トレヴェリアンが最初の「覚書」のなかで論じた、ローマ字が採用されることを通して、「英語から汲み出された語彙や概念が豊富に供給されることによって、その国民文学が豊かになるだろう」という考え方につながる。

議論はここに止まらなかった。1834年の中ごろ、「住民たちの真の友人」と署名されたローマ字擁護論が発表される (Williams: 134)。著者はこのなかで、インドの諸方言はすべてサンスクリットから出ているのだが、使う文字が異なっているため、「人々は互いを見知らぬ人、異邦人のように見做しがちである」、そこで同じローマ字を使えば、人々がおおくの異邦人に分かれているとは感じられなくなるだろう、という。トレヴェリアンは1836年11月の文章のなかで、さらに一歩進めて、「インドの民衆がいつか統合された国民になる唯一の可能性は、あらゆる点において英文学を植えつけられることにかかっており、(中略)もしこれが受け入れられれば、英語の文字を全般的に採用することがそのきわめて重要な助けになるだろうことも、認められるべきである。この文字によってヨーロッパの術語と、またその結果、ヨーロッパの概念が、他の場合よりも一層容易にまた正確に導入される。(後略)」そして一種類の文字によって、さまざまな統合が進むと述べる (Williams: 198-99)。

つまりトレヴェリアンらは、インドの言語をローマ字化することによって、それを英語と融合させ、国民文学の創出に耐えうるような言語へと成長させつつ、国民統合にも資することを考えていたのである。

### Ⅲ 表記システムの問題

#### 1 ジョーンズとギルクリスト

だが、ローマ字化は、技術的におおきな問題を含んでいた。すでにみたようにタイトラーは、ローマ字論の難点として、表記法の問題を提起した。じつは英語の場合が典型的なのだが、英語の綴りと発音は一对一では対応しておらず、その正書法は現在でも非常に混乱した状態にある。このような事態にもとづいてタイトラーは、「われわれのアルファベットは冗長かつ不完全で、野蠻で非科学的であり、アラビア語やサンスクリット (の文字) をそれに替えることは、知性の前進になるどころか、あきらかな退化になるだろう」といい、さらに東洋の言語にはローマ字で表記できない音声がある

ことや、人によって表記法がまちまちなものになってしまう可能性などを指摘する (Williams: 42-43)。

トレヴェリアンとおなじ立場から論争に参加していたダフ (Alexander Duff) が、この点にかんしてひとつの答えを提出した。すなわち、ウィリアム=ジョーンズ (William Jones) のシステムがもっとも簡潔かつ実用的で、普遍的に適用できるとしたうえで、ローマ字を使ってどのようにデヴァナーガリーとペルシア語を表記するのかについて、具体的な一覧を提示したのである (Williams: 77-91)。ダフは、1830年にカルカッタに到着したスコットランド人で、英語教育を重視し、最初のアングリシスト的宣教師といわれている人物である。1831年にデリーからカルカッタに転任したトレヴェリアンは、ここでダフと親交をむすび、キリスト教化のための英語教育の重要性にかんして、ダフに共感していたという (Hilliker: 282)。

ダフにたいして、プリンセップがすぐさま反論をよせた。その要点は、現在、ジョーンズではなく、ギルクリスト (John Borthwick Gilchrist) の表記法がすでにある程度定着してきている、ということである (Williams: 147)。ここでまず、おもにプリンセップに依拠しながら、インド諸言語のローマ字表記法の歴史をまとめておきたい。インドで公の場にはじめて現われたローマ字表記は、ハルヘッド (Nathaniel Brassey Halhed) がヒンドゥー法にかんする書物 *A Code of Gentoo Laws, or Ordinations of the Pundits* の序文のなかで示したもので、1775年のことだった。その後、1788年に発刊されたアジア協会誌 *Asiatic Researches* 第1号に、ジョーンズが *On the Orthography of Asiatic Words in Roman Letters* を発表し、アジア諸言語の表記法の問題にはじめて本格的に取り組んだ。ジョーンズのこの表記法は、その後ながくアジア協会誌のなかで使われるが、そこをこえて普及することはなかった。

それにたいして、ある程度ひろく受けいれられたのは、ギルクリストの表記法だった。スコットランド生まれのギルクリストは、ジョーンズよりも1年はやくインドに来て、東インド会社の職員に採用される。そしてヒンドスタニー語に注目し、1786年には『英語・ヒン

ドスタニー語辞典』の第1冊目を刊行した。この辞書は、ローマ字とインドの文字で意味が解説してあり、この時点で、ギルクリストの表記法が公にされたと考えてよいだろう。これは、ジョーンズが表記法を発表する以前のことであり、当時、ギルクリストはそれを知らなかった (Lepsius: 32)。その結果インドでは、おもなローマ字表記法としてジョーンズとギルクリストの、2種類のシステムが併存することになった。

## 2 普遍性をめざして

両者は子音の面では共通しているが、母音の取り扱いがおおきく異なっている。つぎに較べて見よう (Williams: 150) (Williams はギルクリストの長母音 ee を e としているが、誤植だと思われるので修正した)。

ジョーンズ		ギルクリスト	
a	ā (a の長母音)	u	a
i	í (i の長母音)	i	ee
u	ú (u の長母音)	oo	oo
e	ai (二重母音 a+i)	e	ue
o	au (二重母音 a+u)	o	uo

一見して、ジョーンズのほうが音声の対応関係が整然としており、系統的に構成されていることがわかる。それにたいしてギルクリストの場合はとくに、短母音 (ʌ) に “u” をあて、その長母音を “a” とし、また “i” の長母音に “ee” をあてている点が不規則で奇妙でもある。ただしギルクリストがローマ字をこのように使ったのは、いわれないことではない。cull (ʌ) や call (ɔ:), keel (i) など、英語のなかに存在するローマ字の使い方を採用したのである。そこで、現代の研究者によって、「せいぜいのところ、ギルクリストのシステムはイギリス人の役に立つだけだった。他のヨーロッパ諸国の人には、使うのはむずかしかっただろう (後略)」と評されることにもなる (Kidwai: 120)。これにたいしてジョーンズは、母音をヨーロッパ大陸的に、さらに限定すればイタリア語的に使うのが、その

特徴となっている。

だが、ジョーンズの表記法が学術用として使われるに止まったの  
にたいして、ギルクリストの表記法は、かれが教育活動と出版活動  
にさかんに携ったため、ある程度広まることになった (Williams: 161)。  
1799年1月、ギルクリストは東インド会社職員の教育のために、  
Oriental Seminary (Gilchrist Seminary) を開校し、ペルシア語とヒン  
ドスタニー語を教えはじめ (Kidwai: 13)。この学校が発展的に解  
消し、1800年5月にあらたに創設された教育機関が、さきに紹介し  
たフォート=ウィリアム=カレッジであり、ギルクリストはそのヒ  
ンドスタニー語の教授に迎えられた。かれは学習者の負担を軽減す  
るために、最初の段階ではローマ字を導入した。これが、ギルクリ  
ストの教育法のおおきな特徴である (Kidwai: 75)。この学校で教育  
をうけた青年が東インド会社の職員になるのであって、しかもヒン  
ドスタニー語はやがて東インド会社の業務にも使われるようになる。  
ヒンドスタニー語とともにギルクリストの表記法も重要性を増した  
ことは想像にかたくない。一方でかれは、とりわけ1802年から04年  
にかけて、インドの諸言語に訳したローマ字イソップ物語など、ロー  
マ字表記に関係した書物をつぎつぎに出版する。ギルクリストはそ  
ののち、1804年にフォート=ウィリアム=カレッジを辞職して帰国  
するが、その表記システムは1822年には、土地台帳や地図作成のた  
めにインド政府にも採用される (Williams: 143)。

プリンセップはこうした事実にもとづいて、ジョーンズの表記法  
をあらためて導入することに反対した。1834年6月のことである。  
それにたいして同年8月、トレヴェリアンが反論する (Williams: 151-  
154, 157)。トレヴェリアンはまず、すでに紹介したような母音表記  
をとりあげて、ギルクリストの表記法は「システムの欠如」であり、  
「表記法のシステムではない」と批判し、そもそも英語の正書法は  
混乱しているのだが、「ギルクリストは英語の綴りの、せまい世界  
に閉じこもっている」とする。他方、ジョーンズの表記法はそうし  
た狭隘さを免れており、「全世界に通用する音声表記法の、ひとつ  
の画一的システムがしかるべき時に構築される、そのひとつの基礎

が築かれることになるだろう。(中略) 哲学者と博愛主義者にとって欠くべからざる普遍言語の構築について、音声表記法の普遍システムの策定こそが、全人類の諸集団すべてのあいだに完全に自由な交流をうみだすことになるだろう」と述べる。

また、ギルクリストの表記法がすでに定着しているという議論にたいしては、それはインドにいるヨーロッパ人にとっての話であり、「浅黒い顔をした何億ものアジアの兄弟たちの利益が、われわれの目的」なのだとする。トレヴェリアンのローマ字化論の①「普遍性」と③「大衆教育」の観点が、ここにも貫かれていることがわかる。「普遍性」については、ジョーンズの表記法を推奨するなかでダフもすでに、「普遍的な適用」の可能性が高いことを指摘している(Williams: 78)。

#### IV ローマ字論の終焉

##### 1 マコーリの「覚書」

1834年に以上のような議論が闘わされていたさなか、トレヴェリアンに有力な援軍が現われた。インド総督のもとにおかれた参事会の法律担当メンバーとして同年6月にインドに着任したマコーリである。マコーリは、のちに全5巻の『イギリス史』を執筆することになる著名な歴史家であり、また政治家、詩人でもあった。かれは、教育観をおなじくするトレヴェリアンと密接な関係をもち、ベンティンク総督をトレヴェリアンの側にひきつけるかたわら(Zastoupil and Moir: 28)、1835年2月には、前述のように「教育にかんする覚書」を発表した。この「覚書」は、直接には1813年の教育条項を英語寄りに解釈するためのものである。このなかでマコーリは、「ヨーロッパのすぐれた図書館の本棚ひとつだけでも、インドとアラビアの現地の全著述に匹敵する価値がある」と、西洋の学術の圧倒的な優位を説いたうえで、さらに、西洋諸語のなかでも英語が卓越しているとして、インドでの教育は英語で行い、そのために予算を使うべきだとする。ただし、これは大衆教育を意味するのではなく、大衆とイギリス人とのあいだに立って、その意思疎通の役割を果たす階層

を育てようとするものであった。そしてこれらの階層の人々に、「この国の現地語を磨き、西洋の用語体系から借用した科学用語によってそれを豊かにし、徐々に、住民の大多数に知識を伝える媒体にふさわしいものにする」ことを任せるという（Zastoupil and Moir: 165, 171）。

この「覚書」の内容とトレヴェリアンとの関係について、当時すでに、「マコーリ氏の覚書は、トレヴェリアン氏の論文の焼きなおしである」との指摘がなされていた。トレヴェリアンは、マコーリへの基本的な情報提供者のひとりと推定されているだけでなく、同年12月には、マコーリの妹と結婚しており、非常に近い関係にあった。Zastoupil と Moir は、マコーリの「覚書」は、トレヴェリアンの影響のもとで書かれたものとする（Zastoupil and Moir: 173, 302）。

ただし、Zastoupil と Moir は見逃しているが、トレヴェリアンのローマ字論と比べてみると、重要な違いのあることが明らかとなる。トレヴェリアンが志向していたのは、そのころイギリス本国でもまだ実施されていなかった大衆教育だったが、マコーリの力点はいわば中間階層にあり、その下にいる大衆およびその言語にかんしては、英語教育を受けたこの中間階層が責任をもつべきものとした。トレヴェリアンはその後、インドの教育を論じた *On the Education of the People of India* を1838年に出版するが、教育をうけた階層を通してヨーロッパの知識が大衆に届くとは述べるものの、英単語によってインド諸語が豊かになり、諸方言が統合される等々については、以前と同じ考え方を繰り返している（Zastoupil and Moir: 294-295）。トレヴェリアンは一貫して、下層の人々をも視野に入れていたと思われる。

さて、マコーリが「覚書」を発表した翌月の3月7日、インド政府は、教育にわりあてられた財源はすべて英語（による）教育にあてると決定した。そののちもオリエンタリストとの論争はしばらく続くが、この決定によって英語派の勝利は確定的なものとなり、怒ったプリンセップらは GCPI を辞任し、4月末にはマコーリ自身が同委員会の議長となる（Zastoupil and Moir: 29）。その後、1837年には、

東インド会社は英語とヒンドスタニー語を業務に使用することに決定し (Asaduddin: 49)、1844年には、政府の職を求めるものは英語の知識が必須であると、公式に発表される (ビバン=チャンドラ: 124)。こうして、オリエンタリズムの時代は1830年代には終わりをつげる。

なお一方で、周知のように、政府のこうした方針の背後には、英語に堪能なインド人を養成して官吏に採用し、それによって行政費用を削減しようとする、きわめて現実的な目論見があった。

## 2 ローマ字の導入

それでは当時、ローマ字導入の実態はどのようなになっていたのだろうか。ローマ字論に好意的だった雑誌 *Calcutta Christian Observer* の1834年、35年前後の記事のなかには、ローマ字を導入した、もしくは導入しようとしている人たちの情報が、いくつか見出せる。ただし詳細がある程度判明するのは、インド最東部の、アッサム地域のものだけである。

1824年から26年にかけての第一次ビルマ戦争によってイギリスの統治下に入ったばかりのアッサムは、30年代に至ってもまだ安定していなかった。このようなアッサムへ、1835年(?)、トレヴェリアン、宣教師・ピアース (William H. Pearce)、アッサムの弁務官であったジェンキンス (Francis Jenkins) らが、アメリカン=バプティストを招聘した (*The Baptist Missionary Magazine*, 16 (6), 1836.6: 151)。とくにジェンキンスは、東北辺境の諸民族を静める仕事は、かれらの間に福音を広めることによって効果的に進むと考えていたのである (Barpujari: 269)。

アッサムを担当することになったのは1833年にビルマに到着したばかりのブラウン (Nathan Brown) だった。ブラウンの回想によれば、「インドの諸言語をローマ字で印刷するという計画」に関連して、「トレヴェリアンと深い関係を結んだ」という (Brown: 104-105)。トレヴェリアンとともにアメリカン=バプティストの招聘にかかわったピアースも、トレヴェリアンとならぶローマ字推進派の主要人物のひとりである (Williams: Preface, x)。こうしてアッサムは、ローマ



字導入のいわば実験場となった。

ブラウンは、アッサム語とカムティ語のローマ字教本の作成、学校の開設などに従事しながら宣教活動が続けていたが、1839年1月、カムティ族とジンポー族が連合して宣教基地のあったサディヤを襲撃し、イギリス人士官らが殺されるという事件が発生した（*The Baptist Missionary Magazine*, 19 (12), 1839.12: 278）。5月になると、ミッションは荒廃したサディヤを離れ、1842年にはアッサム中央部のシブサガルに移る。まもなくこれにともなって布教の対象も、それまでの山地諸民族から、おもにアッサム人のみに限定されるようになり（Gammell: 222）、また翻訳は通常、アッサム文字によるアッサム語のみに限定されるようになったという（川島第二郎: 104-105）。こうして40年代の前半には、アッサムでのローマ字導入の試みは、ひとまず終わった。

一方、カルカッタを中心として展開していたローマ字論争は、これよりも数年早く下火になっていた。1859年に出版された Monier Williams ed., *Original Papers Illustrating the History of the Application of the Roman Alphabet to the Languages of India* を見ると、興味深いことに1837年のトレヴェリアンの文章を最後として一旦収録がとぎれ、それが再開するのは1857年からである。

つまりローマ字論争は、英語教育論争をリードして始まり、英語教育論争とともに終わった。これは、両論争が密接な関連を持っていたことを示すと同時に、ローマ字論が終焉に向かった原因としては、他に、マコーリ以降、ローマ字論の基盤であった大衆教育論がむしろ軽視される方向に進んだことが大きかったと考えられる。大衆教育については、1854年に至って、インド政府にその責任を負うよう求める「ウッズの急送公文書」が取締役会から発せられるが、その後も軽視された状態が続いた（ビパン=チャンドラ: 123）。これに加え、トレヴェリアン自身も1838年にはインドを離れて帰国してしまった。

なお1857年以降に議論が再燃したのは、同年に発生したいわゆる「セボイの反乱」によってインド統治の基本方針が再検討を迫られ

たことによる (Williams: 210)。

## おわりに

18世紀末から19世紀初頭にかけて、インドにかかわったイギリス人の間で、西欧の文明（キリスト教を含む）の圧倒的な優位性が確認され、それをインドへ導入しようとする動きが強まる。これは言いかえれば、西欧の文明は非西欧世界にもひとしく普遍的な価値をもつという認識である。その導入のために、教育面での媒体として、エリートには英語が推奨された。さらにローマ字論者は、一般大衆にはローマ字表記による現地語を提案し、英語をとおして、その現地語を育てようと考えた。それは、国民文学の形成から国民統合までを視野に置くものだった。ただし、ローマ字論は、結局は英語教育論のなかで推移してしまい、植民地行政がそののち大衆教育に向かわなかったことともあいまって、30年代のうちに終焉してしまう。

だが残されたものもあった。アッサムのアメリカン＝バプティストは1846年にはアッサム語の新聞を創刊し、1848年には、ブラウンがアッサム語の新約聖書を改訂し、またアッサム語文法書を書いた。かれらがアッサム語の発展のうでで一定の役割を果たしたことは、疑いないだろう。ブラウンらは、クリスチャン＝アッサム文学の基礎を築いたとも評される (Brown: 315, 417, Barpujari: 271)。ローマ字で達成されることはなかったが、これはまさに、かつてトレヴェリアンが夢見たものである。

## 参考文献

川島第二郎「ネーサン・ブラウンのアッサム伝道について」『キリスト教史学』57、2003年。

小谷汪之『ラーム神話と牝牛——ヒンドゥー復古主義とイスラム』（平凡社、1993年）。

ビパン＝チャンドラ著、栗屋利江訳『近代インドの歴史』（山川出版社、2001年）。

*The application of the Roman alphabet to all the oriental languages, contained*

- in a series of papers. written by Messrs. Trevelyan, J. Prinsep and Tytler, A. Duff and H. T. Prinsep. and published in various Calcutta periodical in the year 1834. Serampore Press, 1834.
- Asaduddin, M. "The West in the Nineteenth-Century Imagination: Some Reflections on the Transition from a Persianate Knowledge System To the Template of Urdu and English." *The Annual of Urdu Studies*, 18, 2003 (<http://www.urdustudies.com>).
- The Baptist Missionary Magazine*.
- Barpujari, H. K. *Assam: In the Days of the Company 1826-1858*. Lawyer's Book Stall, 1963.
- Brown, E. W. *The Whole World Kin: A Pioneer Experience among Remote Tribes and Other Labors of Nathan Brown*. Hubbard Bros, 1890.
- Calcutta Christian Observer*.
- Clive, John. *Macaulay, the shaping of the historian*, Knopf, 1973.
- Gammell, William. *A History of American Baptist Missions in Asia, Africa, Europe and North America, under the Care of the American Baptist Missionary Union*, 1849.
- Hilliker, J. F. "Charles Edward Trevelyan as an educational reformer in India 1827-1838." *Canadian Journal of History*, 9, 1974.
- Kidwai, Sadiq-ur-Rahman. *Gilchrist and the 'Language of Hindoostan'*. Rachna Prakashan, 1972.
- Kopf, David. *British Orientalism and the Bengal Renaissance, The Dynamics of Indian Modernization 1773-1835*. University of California Press, 1969.
- Lahiri, Rebati Mohan. *The Annexation of Assam (1824-1854)*, 1954 (?) (reprint, 2003).
- Lepsius, Carl Richard. *Standard Alphabet for reducing unwritten languages and foreign graphic systems to a uniform orthography in European letters*. Williams & Norgate: W. Hertz, 1863 (Elibron Classics reprint 2004).
- Williams, Monier ed. *Original Papers Illustrating the History of the Application of the Roman Alphabet to the Languages of India*. Longman, Brown, Green, Longmans, and Roberts, 1859 (Asian Educational Services reprint 2003).

Zastoupil, Lynn and Moir, Martin ed. *The Great Indian Education Debate, Documents Relating to the Orientalist-Anglicist Controversy, 1781-1843.* Curzon Press, 1999.